

環境管理センターに勤務して思ったこと

齋藤 敏 伸*

私が環境管理センターに勤務して一番に感じたことは、環境問題について全く知らなかったことです。オゾン層破壊、地球温暖化、酸性雨などどういう問題があるのは知っていましたが、自分には関係のない問題だと考えていました。今日問題になっている環境問題はあたかも自分が被害者のように考えていました。しかし実際は、自分が電気やガスを消費することやごみを出すことで地球温暖化に寄与し、燃えるごみの中にプラスチック類を入れることで発生する発癌性物質で誰かが苦しんでいる、などのことをまじめに考えてはいませんでした。公害問題のように加害者と被害者がはっきりしているのではなく、自分が被害者でもあり加害者でもあるということです。このように考えると、環境問題を自分の問題と考え、ごみの分別やリサイクルを積極的に行おうと思いました。また、化学の知識が全くないことも痛感しました。学生時代はただ何となく過ごし化学を勉強した気持ちになっていたが、環境管理センターの職員は大学で使われる膨大な数の化学物質の性状および危険性を知って業務を行っている姿を見て、今までの自分が恥ずかしくなった。

環境管理センターに勤務するまでは、学生の環境に対するモラルをあまり信用していなかったので、月に一回行われる定期分析で、重金属や有機塩素化合物などがたくさん検出され、排水の異常がたくさん発生すると考えていたが、実際は考えていたよりかなり水質異常が少なく、岡山大学の学生はしっかり教育が行き届いていると思った。しかし、夜間にpH異常が多発することから他人の目がなくなると心がゆるみがちになるのかもしれない。

排水基準を遵守する、これはもちろん大切なことであり、遵守できなければ当然罰則を受ける。しかし、排水基準は環境基準を遵守するために決められた値であり、環境基準内であっても被害が無くなる訳ではない。また、規制されている物質以外にも危険性のある物が多い。特に、大学のように多種多様な研究活動をしている所では、規制されていない危険な物質が多いから、研究者は排水基準を遵守するだけでなく環境を守るという積極的な心構えでいてほしい。

環境問題を解決するには環境問題についての知識を蓄積するだけではなく、リサイクルやごみの減量など、身近なことを実践することが大切だと思う。また、化学薬品など危険な物を取り扱う人は、規則だから有害物質を出さないのではなく、環境を守るという使命感によって積極的に有害物質を出さないように努めることが大切だと思う。岡山大学の学生は将来、政治や経済の中心で活躍したり研究開発に携わっていくわけだから、自己の利益だけにとらわれず、21世紀の環境を考えて行動しなければならない。そのために大学時代に環境保全に対する意識を持つよう教育を受けることが大切だと思う。

環境問題は国家や企業や国民などの利益が複雑に絡み合い単純には解決できそうもない。それぞれが自己の利益を主張しても問題の解決にはならない。私はこれからも環境に携わっていきたいと思いますし、

環境が良くなることを期待しています。だから、行政機関には環境問題を考えた政策や規制を推進することを期待していますし、企業や個人が自己の利益だけにとらわれず、負担をすることを受け入れ、全体が協力して環境を守っていく社会を期待しています。

(※前環境管理センター技術補佐員，現(株)ヴァイオス)